

---

# ずっと、このままたよ

光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ずっと、このままたよ

### 【Nコード】

N0110Z

### 【作者名】

光

### 【あらすじ】

常磐亜紗美は、元気の良い活発な？歳の女の子。

ある日、クラスに男子生徒が転校して来た、彼の名は時田光孝と  
言う。

光孝は、頭が良くスポーツ万能なので、女子の中で告白する子も  
いたが。

「好きな子がいるから」と全員、断られた。

はたして、光孝の好きな子は……？

? クラスに

朝7時。

ピピピピピ。イ。

目覚まし時計が鳴って、亜紗美は目を覚まし部屋を出て、洗面所で顔を洗いいりびング行き母親。

「おはよう」

「おはよう」

挨拶を交わし、座り朝食を食べて部屋でランドルを背負い。

「いつてきま す」

家を出て、学校に向かい歩いていると肩を叩かれ、振り向くとクラスメイトの石橋麗子が立っでいて。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、学校に向かって歩いていると。

「ねえ、今日、転校生が来るの、知ってる？」

「知らない、なんで麗ちゃんが知ってるの？」

聞くと。

「昨日、職員室に行った時、ボードに書いてあったんの」

「ふうん、そうなんだ」

校門を潜り、教室に行きクラスメイトとしゃべっていると。

キンコーンカンコーン、キンコーンカンコーン。

チャイムがなり、担任が入って来て出席簿を教壇に置き。

「今日は、転校生が来ているので紹介します」

すると、生徒たちが騒ぎ始め出すと。

「静かにして下さい」

怒ると、生徒たちが静かになり廊下に向かって。

「じゃ、入って来て下さい」

1人の茶髪の男子生徒が入って来て教壇に立つと、担任がホワイボードにその男子生徒の名を書いた、時田光孝と。

「時田くんは、お父さんの仕事の関係でこの町に引っ越して来ましたが、まだ、わからない事があると知れませんが、聞かれたら教えてあげて下さいね」

「はい」

返事をする。

「じゃ、時田くん、一言お願いします」

光孝の肩をポンと叩くと。

「初めまして、時田光孝です、よろしくお願いします」

頭を下げると、担任が。

「常磐さん」

「はい」

返事をする。

「あの子の隣に座ってくれるかな？」

「はい」

返事をして、与えられた席に行き隣に座っている亜紗美に。

「よろしくね」

「こちらこそ」

席に座ると、出席を取って授業を始めた。

放課後。

亜紗美がランドセルの中に授業道具を入れてみると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩きながら

「ねえ」

「うん、何？」

「時田くんって、結構イケてるよね？」

「そうかな？」

首をかしげると。

「私、ああいう男の子、タイプなんだ」  
浮かれながら言い、麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰った。

? キュン

光孝が転校して来て、5日が過ぎた。

頭も良く、スポーツ万能な光孝はクラスの人気者になっていた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校門をくぐり教室に行き担任が来るのを待っていると、チャイムがなり担任が来て出席を取り算数の授業を始め、問題を書き。

「じゃ、この問題を時田くん解いてくれないかな？」

「はい」

席を立ち、ボードに書いてある問題を解き始め全問解くと。

「皆さん、合っていますか あ？」

「合ってます」

一斉に言つと。

「ありがとうございます、戻っていいですよ」

席に戻ると、授業を続けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「宿題、やるつよ？」

「うん、いいよ」

別れ、家に帰って宿題の教科書と筆記道具を手提げに入れて、キ

ツチンに行き。

「麗ちゃん家で、宿題して来るね」

家を出て、自転車に乗って麗子の家に向かった。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると小さいテーブルが出ていて座り、宿題を始め1時間後。

「終わった」

ノートを閉じて、亜紗美が手提げにしまっている。

「ジュース、持ってくるね」

部屋を出て行き、本棚からマンガ本を出して見ているとジュースとお菓子を持って入って来て、グラスに注ぎ目の前に置くと。

「ありがとう」

見ながら飲み、全部見終り立ち上がり。

「帰るね、バイバイ」

麗子の家を出て、自転車乗って帰る途中で、キョロキョロしている光孝が見え。

(どうしたんだろう?)

光孝の元に行き。

「どうしたの?」

「あつ! 常磐さん、文房具店ってどこにあるか教えて?」

「いいよ」

文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降り店内に入り2人は、ノートが置いてある場所に行き1ずつノートを持ち亜紗美はシャープペンの替え芯を持って、レジで支払いをして店を出て自転車に乗ろうとした時、

笑みを浮かべ。

「ありがとう、助かったよ」

礼を言われた時、小さな胸がキュンと締め付けられる感じがした。

(何、この感じ?)

胸を押さえていると、心配そうな声で。

「だ・大丈夫?」

「何でもないから、じゃあ、明日」

別れ、家に帰りながら。

「あれって、何だったんだろう? まっいいか」



？ 勘違い

5日が経った。

亜紗美は文房具店の事以来、光孝を見ると胸が締め付けられる感じは続いていた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校庭を歩きながら。

「昨日のお笑い、見た？」

「うん、見たよ、面白かったね」

話しながら歩いていると、背後で。

「おはよう」

光孝の声がし、2人は振り向き。

「おはよう、時田くん」

麗子は挨拶したが、亜紗美は胸が締め付けられる感じがし。

「麗ちゃん、行こう」

「う・うん」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れてみると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、ハイバイ」

別れ、家に帰り宿題をしてベッドで雑誌を見ながら。

(他の男子を見ても平気なのに、なんで、時田くんを見ると胸が締め付けられるんだろう?)

考えながらページを捲っていると、「お悩みコーナー」と言うページで目が留まった、そこには「1人の男の子を見ると、何も話す事が出来ない、どうすれば話せるように慣れますか、教えて下さい?」と書いてあって。

「私と、似てる?」

言い、アドバイスを讀むと。

「大丈夫と思い、大きく深呼吸して話し掛けてみれば、必ずうまく行くよ」と書いてあり。

「ふん、やってみよう」

雑誌を閉じて、部屋を出た。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で光孝の姿が見え、昨日の雑誌のフレーズを思い出し、深呼吸をして。

「よしっ!」

光孝に話しかけようとした時、背後で。

「おはよう、亜紗美」

振り向き。

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わしていると、

「おはよう」

「おはよう、時田くん」

教室に向かいながら。

「もう、学校に慣れた?」

「うん、少しね」

話している姿を見て。

(いいな あ 楽しそう)

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

光孝の前にクラスメイトの長谷川奈美が立ち。

「時田くん、ちょっといいかな？」

「うん」

教室を出て行くと、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩きながら。

「亜紗美ってさあ」

「うん、何？」

「時田くんの事、避けているの？」

「別に、避けていないよ、何で？」

「だって、時田くんが来ると黙っちゃうから、そうかなあて思って

さあ」

「べ・別に、そんなんじゃないから」

(時田くんを見ると、胸が締め付けられる感じがするんだもん)

下を向いて答えると。

「ご・ごめん、私の勘違いだったみたい、本当にごめんね」

「ううん、いいよ」

笑みを浮かべ、麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰る道を歩いていると隣に光孝が来て。

「常磐さん」

「あっ！ 時田くん」

「常磐さんの家って、この辺なの？」

「うん、時田くんの家も？」

「うん」

頷き。

「一緒に帰ろうよ？」

「う・うん、いいよ」

しゃべりながら帰り道を歩いていると、いままで締め付けられていた感じは消え、胸が温かくなる感じを感じ亜紗美の家の前で。

「私ん家、ここなんだ」

「ふうん、僕ん家とそんなに離れていないんだね、じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入って部屋で宿題を始めた。

? 告白された

光孝としゃべる様になって5日が過ぎた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に向かって歩いていると麗子に逢い。

「おはよう、麗ちゃん」

「おはよう、亜紗美に時田くん」

教室に入り、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「時田くん、ちょっといいかな？」

「うん、何？」

「ここじゃ、ちょっと」

「わかった」

教室を出て行き、亜紗美は帰ろうとしたが2人か気になり探しに行き、校舎の裏で2人を見つけ、物陰に隠れ会話を聞いた。

「ごめん、僕には好きな子がいるから石橋さんとは付き合えないよ、ごめんね」

「ううん、こっちこそ呼び出して」

麗子に見つからない内に教室に戻り、ランドセルを背負うと麗子が元気なさそうに戻って来た、それもそのはずだ、告白した人にふられたのだから。

「麗ちゃん、先に帰るね、じゃあ」

「うん」

学校を出て、家に帰り部屋で宿題をしながら。

(時田くんの好きな子って、誰なのかな?)  
考えた。

光孝の好きな子はわからないまま、数日が過ぎた。  
校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、歩きながら。

「時田くんって、お笑いとか好き?」

「うん、好きだよ、の神様とか毎週見てるよ」

「私も見てる、あれ面白いよね」  
教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「ねえ、常磐さん」

「うん、何?」

「話があるんだけど、いいかな?」

「いいよ、何?」

「ここじゃ、だから場所変えていい?」

教室を出て、校舎の裏で光孝は顔を赤くして。

「好きです、僕と付き合ってください」

いきなりの告白に。

「えっ!」

驚いた、なんと光孝の好きな子は亜紗美だったのだ。

「いいよ、付き合っても」

「本当?」

「うん、よろしくね」

「こ・こちらこそ」

教室に戻り、ランドセルを背負い学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入って部屋で宿題を始めた。

? 初デート

2人が付き合い始め、初めての金曜日。

家を出て、学校に向かって歩き校門の前で、光孝に逢い。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「常磐さん、帰ろうよ?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「ねえ、常磐さん」

「うん、何?」

「明日、映画を観に行こうよ?」

「いいよ」

(これって、デートの誘い)

「じゃ、?時に迎えに来るから」

「うん、待ってるから、バイバイ」

別れ、中に入って部屋で宿題を始めた。

次の日。

9時に起き、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう」

挨拶をすると、驚きながら。

「どうしたの? 休みの日はお昼過ぎまで寝ているのに?」

「?時に友達と映画を観に行くの、だから、ご飯」



朝食を全部食べて、光孝を待っていると。  
ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っ  
いて。

「おはよう、行こうか？」

「うん」

家を出て、自転車に乗り映画館に向かった。

映画館に着き、自転車を降りて入場口で半券と料金を払い、館内  
に入ってスクリーンから？列目に座りベルが鳴ると、徐々に暗くな  
りスクリーンに映像が映し出された、2人が観ている映画は週刊マ  
ンガ雑誌で人気のマンガのアニメ映画で、原作者が映画のために書  
き下ろした作品で2人は真剣に観て2時間後、映画は終わり館外に  
出て。

「眩しい」

手を目の上にかざしていると。

「お昼、ファミレスでいい？」

「うん」

自転車に乗り、ファミレスに向かった。

ファミレスに着き、自転車を降り店内に入りキョロキョロしてい  
ると、ウェイトレスが来て。

「いらっしやいませ、何名様でしょうか？」

「2人です」

答えると、空いている席に案内してくれ2人が座ると。

「お決まりになりましたら、お呼び下さい」

一礼をして去って行き、2人はメニューを見て選び始めて数分後。  
「決まった？」

「うん」

テーブルの隅に置いてあるブザーを押すと、ウェイトレスが来て。

「お決まりでしょうか？」

オーダーを取る準備をすると。

「常磐さんから、どうぞ」

「じゃあ、私はハンバーグセットのライスと、オレンジジュースで」

「僕も、ハンバーグセットのライスとコーラで、お願いします」

オーダーを取ると。

「少々、お待ち下さい」

一礼して去って行き数十分後、料理が運ばれて来て目の前に置かれ。

「以上で、ご注文はよろしいでしょうか？」

「はい」

「ごゆっくり、どうぞ」

一礼をして去って行き。

「いただきます」

食べ始め、全部食べ食休みをして。

「出ようか？」

「うん」

レジで支払いをして店を出て、自転車に乗り亜紗美の家の前で。

「今日は、楽しかったよ」

「喜んでもらえて嬉しいよ、じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

？ 図書館での勉強

1 学期最後の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

担任がクラフト封筒を持っては入って来て。

「では、通知表を渡しますので、呼ばれたら取りに来て下さい」

生徒の名を呼び始め、生徒全員に渡すと。

「明日から夏休みです、交通事故等には気をつけて、登校日に笑顔で逢いましょう、では日直さん」

「規律」

号令をかけると、生徒たちは立ち上がり。

「礼」

頭を下げ、担任が出て行くと。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜佐美の家の前で。

「常磐さん」

「うん、何？」

「明日から、一緒に勉強しない？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、9時に迎えに来るよ」

「うん、わかった、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま あ」

「おかえり」

ランドセルの中から、通知表を出し。

「はい」

渡すと、受け取り見て。

「よく、頑張りました」

頭を撫でて。

「じゃあ、夕飯は大好きなカニクリームコロッケにしましょう」

「わ い、やった」

部屋に行き、荷物を整理した。

次の日。

8時に起き、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう」

「おはよう、朝飯はどっちするの？」

「パン」

答えると、キッチンで料理を作りテーブルに置かれると、食べ始め全部食べテレビを見ていると。

ピンポン。

ドアチャイムの音が聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っ

「おはよう、行こうか？」

「うん」

外に出て、自転車に乗って図書館に向かった。

図書館に着き、自転車から降りて館内に入ると冷房が効いていて、2人は向かい合いに座り。

「じゃあ、5ページしよう?」  
「うん」

テキストを開いて記入を始め、3ページが終わると。  
「ちよつと、休憩しようか?」

「うん」

席を立ち、自動販売機にお金を入れ。

「何、飲む?」

「じゃあ、これ」

ストロベリーミルクのボタンを押し取り出すと、光孝はコーヒのボタンを押しベンチに座り飲んで。

「そろそろ、始めようか?」

「うん」

戻って、残りのページをして5ページが終わり片付けをし、図書館から出て。

「お昼、ハンバーガーでいい?」

「うん」

バーガーショップに向かった。

バーガーショップに着き、自転車を降りて店内に入りカウンターに立つと、女性店員が。

「いらっしゃいませ、こちらでお召し上がりでしょうか?」

「はい」

答え。

「常磐さんから、どうぞ」

「私は、チーズとオレンジのMとポテトのSで」

「僕は、照り焼きとポテトのMとコーラのMで」

注文し食材をトレイに載せてもらつと、支払いをして空いている席に座り食べ、全部食べて。

「出ようか?」

「うん」

トレイを戻して店を出て、自転車に乗り亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

「別れ、中に入った。」

？ 花火大会

夏休み最後の日。

すでに宿題の終わっている、亜紗美はテレビを見ていると電話がなり、母親が出て。

「常磐です、ちょっと待っててね」

受話器を置き、亜紗美の所に来て。

「麗ちゃんから、電話よ」

「はい」

テレビを消し、電話に出た。

「もしもし、何？」

電話は、宿題を写させてと言う内容で。

「いいよ、今から行くね」

電話を切り、部屋に行きテキストを手提げに入れ家を出て、自転車に乗り麗子の家に向かった。

家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「いらっしやい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると手提げからテキストを出して。

「はい」

「ありがとう、本でも見てて」

受け取り、テキストを写し始め、亜紗美は本棚からマンガ本を出し見始め数十分後。

「終わった」

両方のテキストを閉じて、亜紗美に返し。

「ジュース、持って来るね」

部屋を出て行き数分後、ジュースを持って来てグラスに注ぎ、亜

紗美に。

「はい」

「ありがとう」

飲みながら見ていると。

「ねえ、夜、花火を観に行こうよ？」

「うん、いいよ」

「7時に集合ね」

「うん、わかった、じゃあ」

麗子の家を出て、家に帰る途中で光孝に逢い。

「ねえ、時田くん、夜、花火を観に行ける？」

「うん、行けるよ」

「じゃあ、7時に家に来てよ」

「うん、わかった」

別れ、家に帰り中に入ってリビングに行く。

「ただいま あ」

「おかえり」

「ご飯は、何？」

「野菜炒めでいい？」

「うん」

座ると、キッチンに行き夕飯を作りテーブルに置くと。

「いただきます」

全部食べ、光孝を待っていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立っ  
いて。

「おまちどおす」

「行こう」

外に出て、自転車に乗り麗子の家に向かった。

家の前に行くと、麗子とクラスメイトの加藤香織と坂本和美が待



っ  
て  
い  
て  
。

「おまちどう」

5人は、花火大会が開かれる会場に向かった。

会場に着くと、すでに大勢の観客が集まっていて屋台でかき氷を買い、一番観える場所に座り数分後、最初の花火が夜空に音を立てながら打ち上がり、大きな音と共に夜空に花を開くと拍手がわき5人も拍手していると、次々に打ち上げられ最後の？連発の花火が終わると観客たちは帰って行き、自転車に乗って来た道を戻り麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、明日ね」

それぞれの家に帰って行き、亜紗美は光孝と帰り道を自転車を転がし、亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ってリビングに行き母親に。

「ただいま あ」

「おかえり」

冷蔵庫からジュースを出し飲み、部屋に行き下着をバスルームに向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0110z/>

---

ずっと、このままたよ

2011年12月10日01時45分発行